

1マイル以下になったことも救回あったが、無事、予定よりはわずかに遅れただけで1月4日に昭和基地向け第1便が飛んだ。

3. 昭和基地

1月6日に私もふじから昭和基地に向け飛びたった。一面真白な雪と氷の中に最初黒い点が見え、それがどんどん大きくなってくと岩のでた島であることがわかる。まわりが雪と氷でうまっている中にそこだけが黒くはっきり見える。その島が昭和基地のある東オングル島であった。着陸するとそこに真黒に雪焼けした第15次の越冬隊の人々の顔が見える。真黒に雪焼けしているうえにヒゲを長く伸ばしている者もあり、最初誰が誰だか解からなかった。しばらくして第15次の気象のチーフ鈴木剛彦さんを見、ほっとする。

昭和基地は、意外とホコリぼく、工事現場という感じ、CiやAcの雲が4km~2kmくらいに見え、やけに低いのが印象的。

それからの教週間は、建設作業、荷役作業にと忙がしさに追まわられてすごす。そして2月1日より完全に仕事を第次から引き継ぎ、いよいよ越冬に入る。

昭和基地での気象定常観測の仕事は、昨年から4人となり、00Z、12Zの高層気象観測、一日8回の地上気象観測、特殊ゾンデ観測、オゾン全量観測、直達日射観測、APT、FAXの受信、天気解析である。とにかく今は、これらの仕事のワッチに入り、追まわられて過ごしている。

第1次が11名の隊員で初まった越冬観測も、その後基地が徐々に拡張、整備され、7次18名、8次24名、9次、10次29名、11次以後30名となり、また基地建物面積も現在約3,400m²までになってきている。今年は第16次で星合隊長以下30名が環境汚染の研究等を中心に越冬生活に入る。

海外だよりの欄がもうけられ、南極に行くのなら何か書いて送れとのことで、まともなく思いつくままいたらぬ筆をとった次第です。これから一年、これまでの諸先輩の立派な仕事を汚さぬよう、頑張っています。さようなら。

昭和50年2月10日 第16次南極地域観測隊(気象)
沖政 進一

—会員の広場—

春の暁に緑のサハラを見た

私は幼い頃、雨ふりの時などよく一人で地図帳を開いて時を過ぎたものだった。その後四半世紀たった今日でも時々その習慣がでてくる。先日のゴールデンウィークもどこへ行くあても金もなく朝寝をきめこんでいたのだが、子供の頃から親んだ地図帳をふとんの中でひろげてみた。単なる思いつきで「天気」でお話しするようなことではないかもしれぬが、面白いことを考えた。前から気がついてきたことではあるのだが、アラブ連合、アルジェリアの海岸にそう遠くない砂漠地帯に海面下の地域がかなり広く存在しているということである。アラブ連合の方のはカッタラ低地と呼ばれるところだが、広さも20,000km²ほどあり、海岸への最短距離は100km位である。アルジェリアの方のは10,000km²あまりの広さだが海岸から200km程ある。この広さは琵琶湖の15~30倍もある。妄想はこれから先のことで、もしここに海水を引いてみたらどのような気候変化が生じるだろうかということである。周囲は大部分が砂漠であり果しない月の砂漠に通じている。この地域には古くからの遺跡や都市もあることだろうし、水を引くことによる社会的、政治的影響は好ましくないものも多いだろうと思う

が、それらを捨象して考えてみた。最近、サハラ砂漠は広がりがつあるといわれ、一方ではサハラ砂漠の中央部に偉大な古代文明の遺跡が発見されている。この遺跡がつけられた頃もサハラ砂漠は本当に現在と同じ程度の大きさであったのだろうか。近年、大気大循環の研究が進み、この地域の気候は低湿となることが示されている。しかし、サハラの遺跡はどのようにしてつけられたのだろうか。そこが肥沃な地域であったか、肥沃な地域がごく近くにあったのではないだろうか。アメリカの砂漠にも焼畑農業が引き金になってできたものがあるとされているが、本来低湿なこれらの地域では、人為的であれ自然的であれ水を保持する力を失わせる外力が働くと、低湿であるが故に復元力が弱いたためますます乾燥していったのではないだろうか。これらの地域に少々水を引いたからといって急に温暖、湿潤な気候にならないかもしれぬが、少くともそのまわりには草木が成長し花が咲くであろう。大地が豊かになっていくであろう。水を引くことによって気候がどのように変わるか、本来ならば自ら定量的な計算をしてみる必要があると思うのだが、まずはのどかな春の日の夢物語としてこの一文をみていただければ幸いである。

(東北大学理学部 安田 延寿)